

---

# 言靈詩篇 白書

春夏冬 直樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

言霊詩篇 白書

### 【コード】

N0579Q

### 【作者名】

春夏冬 直樹

### 【あらすじ】

今までに書き溜めた多くの詩の中から白をイメージするものを選んで一つの詩篇にしています。

## ライター

カチン

冷たく乾いた音が響き渡る  
何も言わない金属の塊  
ライターを鳴らすのは彼の癖

カチン

初めて彼にプレゼントしたのがこのライター  
無邪気に喜んでいた彼の笑顔

カチン

海が好きだった彼  
結局帰ってこなかった

カチン

天使の雫に濡れたライター  
今私の手の中で彼の声が聞こえる

カチン

++++  
++++  
++++

## 刻

二人の小人が長い針と短い針  
コチカチ コツチンカツチン

いつも仲良く  
コツチンカツチン

だけど時々喧嘩する  
長い針がいつも短い針を追い越そうとする  
短い針はいつも自分だけ置いてきぼり  
だけど二人はすぐに仲良し  
コツチンカツチン

いつでもどこでもコツチンコツチン  
地上から何もかもがなくなっても  
コチンカチン

未来永劫に  
コツチンカツチン

++++++  
++++++  
++++++

声を掛けてもいいですか

教室の隅の机で外ばかり見ているあなた

声を掛けてもいいですか

目をつぶるとあなたの何気ない仕草が繰り返し流れるTVのよう

声を掛けてもいいですか

いつも暗い私

大きなメガネ

お世辞にも綺麗でない私

声を掛ける事が出来るのでしょうか

友達の男子といつも楽しくおしゃべりしているあなた

今日は一人で窓の外を見ています

声を掛ける事が出来たら

ほんの小さな勇気も

私にはないのですか

パンドラの箱に残された希望を私にください

心臓の鼓動が周りの空気を振るわせる

声を掛けてもいいですか

## LOVE

あなたのその愛は誰のためにあるの  
君のその愛は誰のために存在するの  
草原に咲く白い花々のような君に恋をした青年と  
力強い海風のようなあなたと  
惹き会う二人のために愛はあるのか  
愛は誰のもの？  
君のもの？  
あなたのもの？  
愛はあの子のものよ  
未来の世界に生まれる二人の結晶  
だから愛は  
あなたでもない  
君でもない  
いつか生まれる赤ちゃんのもの

++++  
++++

## 行進

おいっちに おいっちに

右腕、左腕交互に振って  
おいっちに おいっちに

右足、左足交互に上げて  
おいっちに おいっちに

掛け声元気に  
おいっちに おいっちに

娘の小さな手を牽き  
おいっちに おいっちに

アパートの階段を登り  
おいっちに おいっちに

明日に向かって  
おいっちに おいっちに



## 道程

昨日の明日は今日じゃない

明日の昨日も今日じゃない

今という時間はあつという間に過去へと姿を変えてしまつ  
手を伸ばせばそこには未来の出来事がある

くよくよするのは何でだろう

今を見つめている自分は何だろう

今なんてそんなものは存在しないんだ

常に未来へと流れる時間の中で

ただ過ぎ去つた過去を悔やんでいるだけだ

ならば今をくよくよすることは何の意味もないこと

明日に向かつてただ歩くだけ

過去の尻尾を引き摺って

それが僕の歩んできた道になる

## 百年の恋

今これを読んでいるあなたへ

もしかしたら私が生きたの時間よりも百年後かもしれない

それでもいい

私はもうすぐこの世界とお別れします

不治の病に侵された私

まだ一度も恋をしていない私

もし許されるならば

今これを読んでくださっているあなたと恋がしてみたい

私が残す言葉は紙の上の滲みとなり

百年後のあなたへと伝わるのでしょうか

書庫の中で埃の被った古い本

偶然であつたかもしれないけれど

中を開いて光を満たしてくれてありがとう

すでにこの世にはいない私のメッセージが滲みから文字へと変わる

でしょう

もしあなたが私の恋を受け止めてくれるのならば

私は生まれ変わってあなたに会いに行きたい

せめて、この世を去るときには苦しみが少ないように

そして生まれ変わった私があなたと出会えますように

## しあわせ

私にとって幸せとは何か

それは詩で会話すること

詩は心の移し鏡

楽しい時も

怒れる時も

哀しい時も

嬉しい事も

その全てを包み隠さず表現してくれる

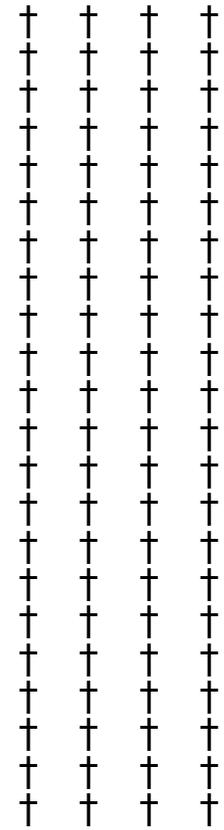
たとえ文法が間違っけていても

言葉はちゃんと心を映してくれる

そんな詩が私は好きです

詩と詩で会話ができる

それが私の詩逢わせ



## 積み木

小春日和の陽だまりの中

気が付けば彼がいつも座っていたベンチに腰掛けていた

彼の姿がない私の横には木漏れ日がまるで陽炎のように差し込んで  
いる

風の便りに彼が結婚をしたと知った

若かった私はなんにつけても突っ張り、いきり立っていた

そして、恋はあっけなく終わった

彼はいつも私のわがままを静かにそしてやわらかく包んでいてくれ  
たのに

そんな彼の優しさに私は気付くことが出来なかった

そのとき恋を失ったと思っていた

だけどそれは間違い

恋は失うものではない

恋はまるで積み木を積み上げるようなもの

一人ではすぐに崩れてしまう積み木

いつも彼の手を借りて積み上げていたのに

積みあがった積み木を勝手に崩してしまったのは私

今ならこんなにはつきりとわかつているのに

もうどうしようもないこと

今も私の手の中には崩れてしまった積み木

気が付くとひとつだけ手の中から零れ落ちて私の足元に転がった

力の入らない手を伸ばす

目の前に誰かの手が積み木を拾って私の手の中に

また、恋の積み木が始まる予感

## ぬいぐるみ

言いたい事は山ほどあるさ

いくらおいらがぬいぐるみだとしても

耳を引つ張られれば痛いさ

腕をちぎられれば綿も出るさ

だけど子供を楽しませるために我慢していたさ

それなのに興味がなくなれば狭く暗いところに置いてきぼりさ

埃のベールは喉に悪い

梅雨時のじめじめは体中にカビが出来て痒いさ

ゴソゴソとゴキブリに綿を食われることもある

そんな仕打ちにも耐えてきたのに

見つけたとたん燃えるごみはないでしょう

人間なんて勝手なものさ

焼却炉の赤々と燃えるあの炎

人間の世界なんて燃えてしまえばいいのさ

すべて灰になつてしまえ

だけど、おいらはぬいぐるみ

人間に作ってもらわなかったら

人間が消えてしまったら

おいらはこの世界に生まれることが出来ない

## 櫻

荒涼たる雪の広野

動くものは何もなく

音さえも雪の結晶に吸い取られて

無音の世界を築いている

空を仰げば新たなる白い使者の到来

寂しくも儚いこの時間の流れの中で

私はただ黙々と立ち竦む

いつか訪れる春の気配を探しながら

ただ、黙々と立ち竦む

雪の結晶が水の妖精と化し

山々を駆け下り

故郷の海原へと帰るとき

私は持てる力の限りを振り絞り

赤い薔を膨らませましょう

そこかしこに生命の息吹が感じ取れたら

淡い花を咲かせましょう

だから今はじつと動かず

春の到来を待ちましょう

## 星窓の光

雨上がりの向こう側に虹の架け橋が架かる

濃紺へのグラデーションの中

星窓はその厚く締め切っていたカーテンを開け放ち

揺れ動く人の心を天空の彼方へと導く

誰も一人ではない

いつも誰かがあの窓から見つめている

手を伸ばしても届かない遠い彼方にあるあの星窓

だけれど、その光は暖かくあなたを包み込むだろう

あなたは進む

あの光に導かれて

未来のあなたへ

+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+

## 初詩

オギヤーオギヤー

生まれて初めて発する赤子の声

その人の初めての詩

言葉の意味や数など問題ではない

感情の赴くままの言葉

それが言霊の原点

十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十 十

はっぴーばーすでいー

ハッピーバースデー

生まれたばかりの私の赤ちゃん

今日はあなたの一回目の誕生日

ケーキはないけれど

私の言葉でお祝いしましょう

ハッピーバースデー

生まれてきてありがとう

私の中の小さな世界で

元気に蹴っていたあなた

今はまだ皺だらけだけど

きつとお父さんのようにハンサムになるわ

ハッピーバースデー

いつかあなたも父親になるときが来る

そのときは必ず奥さんの傍らにいて

あなたのお父さんのように

私の手を強く握ってね

ハッピーバースデー

## 風花（かざはな）

遠く黒い空より風に運ばれ私の掌に落ちる白い天使

直ぐに解けて水へ変わる

私はまだこの体の中を温かい血液が流れていることを実感する

心の中には凍えそうな寒風が吹き荒ぶというのに

総ての影を覆い隠すほどの白

髪の毛の間にもコートの上にも

解けて自らの存在の証に小さな滲みを作る

降り積もることもなくただ風の中を旅する白い天使

子供たちの歓声が聞こえる

白い天使は冬の妖精の贈り物

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

## おとぎの国

いつも空には太陽が輝き

そよ風は心地いいメロデー

命輝く草原の波

力強く聳え立つ森の木々

鳥は歡喜の歌声

花は煌びやかな絨毯

思いが叶う幸せの国

心に突き刺さった楔を溶かす魔法

妖艶な妖精が光の粒子を撒き散らして飛び回る

笑う人間から迸るエネルギー

どこかがあると信じたい

そんなおとぎの国がどこかがあると

信じていた子供のころの心を大切にしたい

+++++

## オンナとオトコ

オトコが男でなければならぬ時間

それはとても短い時間だけ

それ以外は男でなくても別に困ることはない

オンナが女でなければならぬ時間

それは死ぬまで続く

オトコなんて気楽なものよね

呑気に寝てたり、お酒を飲んだり、好き勝手の仕放題

あのとときだけ男に戻ればいいなんて

それに比べて女なんていつまでもオンナでなくちゃいけないの

だけどこの世で一番の宝物

子供を育める喜びを得られるのはオンナだけ

だから私はオンナでいられるのかしら



## マリオネット

私は操り人形

いつもあなたの手の中で

私につながるその糸を

操っていてくれたのに

なぜに私を置いて出て行ってしまったの

私は一人では動くことさえ出来ないのに

いつもあなたの命令ど通りに動いていたのに

今はベットの傍らで力なく崩れている私

早く来て

そして私を操って

私はあなたがないと何もする気が起きない

あなたのその手で私を動かして

私はマリオネット

誰かに操られていないと生きてはいけない



日出処の私から日没する処のあなたへ

カーテンの隙間から毀れる光の筋

部屋の中に響き渡るビバルディーの四季

徐に起き上がる私に部屋の隅にあるあなたの写真がおはようと言っ

あなたはいつも儀式のように朝を紡いでいたわね

いつも同じ音楽で、一杯の珈琲を作って香りを楽しんでいたわね

いつの間にか私も同じことをしていた

あなたの儀式を忠実に真似をしていた

今は遠くへ旅立ってしまったあなた

私を暗闇の底から救い出してくれたあなた

まだ未来のことなんて考えられないけれど

少しずつ今を歩みだしています

いつかまたあなたの影に出会えるかもしれないから



## 横顔

寂しげな君の横顔を見ていると僕はどうしてよいのかわからなくなる

なぜ君はそんなに悲しい顔をするの

僕のせいなの

何がそんなに哀しいの

僕にはわからない君の心の影

分かってあげたらどんなにも君の力になれるのに

けれども君は何も言わない

君の中の世界には僕が入れない場所があるんだね

いいよ

誰にでも自分だけの大切な場所があるものさ

いつか僕はなってみせる

君の悲しい場所を楽しい場所に作りかえる人間に

だからそれまでは君の傍らに座って

君の横顔を見つめていたい



## 冬枯れの森

冬枯れの森を子供と歩く

歩く足には乾いた音が付きまとう

音がするから子供はうれしくてもっと歩く

乾いた空気が音を包む

寒がりの私にとって冬は嫌いな季節

だけどこのごろ少しずつ好きになり始めたかもしれない

子供の笑顔があるときはいつも私は幸せ

小さな手で枯れた葉っぱをつかみ上げ

誇らしげに見せる

何も無い世界だったはずなのに

この冷たくて張り詰めた空間に

子供の温かい光線が放たれるよう

いつかの私もこんな風に遊んだのだろう

そんなことを考えていると目の前に

あこのころの自分の姿が見える気がした

## カナリア

声高々歌うあなたへの思いを込めて

今日も歌うあなたの姿を慕って

いつも歌うはあなたへの想い

振り返ることがいつか叶うと儚い夢に

明日も歌うあなたへの歌を

声の続く限りあなたへの歌を

この風に乗ってあなたの元に

いつか届く願いを込めて

私はあなたへの愛の歌を歌う

+++++



## ダイナマイトハート

冷たい風が校舎の窓を震わせる

僕は教室の窓から校庭を眺めていた  
授業が終わり、部活動をはじめている

運動など大の苦手な僕にとって  
何でこんな寒い中、走り回るのが分からなかった

まあ、人それぞれ

僕は家路に着こうと席を立った

誰もいないはずの教室に人の気配がした

振り返ると一人の女の子がそこにいた  
時々、うちのクラスの女生徒のところに遊びに来ているのを見かけたことがある

何のようだろう

目が会うとその子は少し俯きながら僕の傍に近寄ってきた

僕の目の前にきたその子は思いつきり後ろの回していた手を前に差し出してきた  
その手には赤いリボンが付いている茶色い包みがあった

無言で受け取る僕

何かいわなきやと考えている間にその子は教室の外へと走り去って  
しまった

ああ、そうか

僕のところには来ることがないと思っていた  
なんだか心が舞い上がってきた  
直ぐに袋の中身を見してみる

そこにあっただのはダイナマイトの形をした箱

中には手作りのハート型の小さなチョコレート  
チョコレートはうれしかったが箱の形が気になった  
お返しをしないと爆破されるということかな  
チョコレートをひとつ取り出して口に放り込んだ  
甘い香りが口の中に広がった

## ハッピーウエディング

透き通る青空の下

白い妖精のような君の姿

戦ぐ風は冬の終わりに春の気配を漂わせる

綺麗な君を包み込むベール

君は笑顔の裏に不安の涙を隠し

手に持ったコサージュを空中高く放り上げる

我先に奪い合う君の友達

彼女たちにも君と同じ幸せが来ますように

これからは二人で時間の更紗を紡いでいこう

心に暗雲が漂うとき

心に雨が吹き荒ぶとき

心に雲ひとつない晴天のとき

心に冷たい雪が降るとき

いつでも君と一緒に

いつまでも君と一緒に

何処までも君と一緒に

ここで君とハッピーウェディング

流れる水は夢の如く

生きるものの色を奪う厳しい冬の雪

春の女神の吐息にその身を溶かし

小さな雫へと変わる

無数の雫は下に下に

手に手をとって僅かな流れとなる

あるものは沢となりて人里の脇を流れる川となる

あるものは深く暗い地の底へ

人知れず見えぬ川となりて人里に湧く泉となる

あるものは囲まれた世界に取り付かれ魚の集う池となる

されど、雪より生まれたばかりの水は己の行く先をまだ知らない

ただ、その身を流れに任せるだけ

いつかあの大空へ舞い戻ることを夢見て

夢の果てに何があるか

幾千もの夢の果てに

今日も水は流れ行く

## ファーザー

父よ

今日僕はあなたと肩を並べた

六歳の冬の日

お母さんの横からいなくなったあなた

子供の僕には何も分からなかった

時間が経つにつれてお母さんの悲しい顔が

事の大きさを感じさせた

父よ

僕は今日という日が来ることに恐怖を覚えていた

僕も同じように病気でこの世界からいなくなるんじゃないかと

いつまでもこの日が来なければ

そんなことばかり考えていた

自分が自分でないような気がしていた

父よ

あなたとの思い出はたった一つ

家族で行った動物園で

走り回っていた僕が石に躓いた時

泣き叫び僕を立ちあがらせてくれた

ごつごつとした大きな手は

僕の記憶に張り付いて

今も消えない

父よ

今日僕は父親になった

まだ赤く皺くちやな息子だけど

元気に手足をばたつかせていた  
僕が生まれたときにあなたが見ていた景色を  
今僕も見えています

父よ

これからの日々はあなたの経験しなかった  
未知の世界

あなたが見れなかった世界

あなたが感じる事が出来なかった世界

あなたがおじいさんになる世界

これから息子と歩んでいく

## 一滴の雨

いつもの喫茶店で向き合う二人

別に何かあったわけではないのに

すれ違う二人の溝は埋まらなかった

彼が別れを切り出したのは当然の成り行き

私も彼もずっと下を向いたまま

最後の時間をすごした

先に店を出て行ったのは彼

彼の姿が見えなくなってから私も店を出た

外は今にも泣き出しそうな曇り空

私の心も曇り空

見上げる空から一滴の雨が頬を伝って落ちてきた

別に泣いているわけではないのに

心が震えた

本当に泣いているわけではないのに…

泣いているわけではないのに…

泣いてなんかいない

泣いてなんか…いない

降り出した雨に涙が流される

冷たい冬の雨に

## メリーゴーランド

真夜中の遊園地に一際眩しくライティングされるメリーゴーランド

白い木馬やカボチャの馬車

上に下に飛び跳ねて

世界の中心で回っている

心踊るメロディーに乗せて

妖精の鱗粉が七色の風を作っている

誰も乗っていないメリーゴーランド

いつまでもいつまでも回り続ける

夜空に散らばる星屑が朝の足音に怯えても

誰かを待っているメリーゴーランド

哀しい心に押し潰された君

希望を失った迷い子

泣き叫ぶ声が涙の泉に消える

ここに来ればみんな笑顔になる

回れまわれメリーゴーランド

いっままでいっままで

## 君に送る言葉

初めて君を見つけたとき

空からは悲しみの雨がふっていた

いつも君のすがたが見たくて

早起きが出来るようになった僕

初めて声を掛けたのは君のほうから

慌て者の僕がポケットから落とし定期入れを拾ってくれたとき

真っ赤い顔になった僕は何もいえず

ただ下を向いて消えゆくような声でありがとうと言った

初めてのデートは心臓の鼓動が体全体を震わしていた僕のほう

一緒に見に行った映画のストーリーはいまだに思い出せない

覚えているのは君の白いワンピースと花の飾りの付いた帽子

あれから何回目の夜が過ぎただろう

今宵、空に輝く蒼い月明かりの下

君に送る言葉がある

「結婚してください」

## あの晴れ上がる空の上に

晴れ上がる空に向かって手を伸ばす

少しでも天国に近づけるように

あなたの手に届くように

ちからいっぱい手を伸ばす

微風が私の手を温かく包む

春の訪れが直ぐそこまで来ている

指と指の隙間から零れ落ちる太陽の光

眩しくて明るくて黄色い

あなたの幻をかき消すように

手を握り締めた

草原を駆け抜ける風の妖精たちが

スカート裾に悪戯をする

風に払われた草達は微笑みながら揺れている

私は今ここにいる

遠く旅立ってしまったあなた

いつかは其処に行くことが出来るけれど

今はここで生きていきます

だから空の上から見守っていてね

泣き虫で弱虫でどうしようもない私だけど

あなたに褒めてもらおうように

今ここで生きていきます

## ココロのカタチ

いつも私を苦しめるココロ

ココロってどんなカタチ

四角い箱？

丸いりんご？

もしかして鉛筆みたいな形だったりして

形の見えないココロ

そんなものに私は苦しめられていると思うと

なんか馬鹿らしくなる

出来ることなら薔薇の花のような心になってみたい

甘い香りのする真つ赤な薔薇

なんて空想するのも悪くないものだね

本当はカタチなんかないのかもしいれないし

アメーバーみたいにどんな形にもなれるものじゃないのかな

だから苦しんだり、笑ったり、泣いたり、怒ったり

いろいろな形があるからココロは不思議なのかな

彼をはじめてみたときにはまるで海に落ちたお星様のような

きらきら、ときどき、そわそわ

いつもココロは気まぐれなもの

そんなココロに振り回されっぱなしの私

もつと強くならないと

探し物は何？

いろいろなものが散らかる部屋の中で

ごそごそと動き回っている君

探し物は何ですか？

昨日、古本屋で見つけた詩集ですか？

去年の春に彼氏からもらった合格祈願のお守りですか？

中学生のときに初めて買った七色のボールペンですか？

小学生のときにお母さんに買ってもらったペンダントですか？

そんな僕の心配した顔を見ると

君は笑顔で探し物が見つかったといった

君のその手には小さな紙切れ

僕が初めて君に手渡した手紙

「こんにちは」としか書かれていないただの紙切れ

今も大切にとっておいたんだ

僕はそっと君のおでこにキスをした

僕の探し物はここにある

## 心を濡らす雨

詩は言葉の絵の具で描く絵画のよう

印象画もあれば、写実画もある

心に広がる風景を描くことはどちらも同じ

似非評論家も同じようにいる

だけど心の風景は決まった形式ではないはず

あれがいい、これは悪い

そんな評論は必要ではないはず

受けた人間が感じるか感じないか

ただそれだけ

だから詩には評論はいらない

そんなものは必要ない

あなたが私の詩に感じるものがあれば

あなたは詩を書けばいい

あなたが感じたことを言葉の絵の具で

真っ白いキャンバスに自由に描けばいい

詩を愛する私の心にはいつも雨が降っている

詩のすばらしさに気が付かない人たちのために

いつも涙を流している

いつか詩が本当の日の光が差し込むまで

私は詩を書き続ける

心を濡らす雨が止む時まで

## 地球と共にあなたも回っている

たとえあなたの意思に関係なくても人は変化している

それは地球が回っているのにそれが感じられないように

ただあなたは一度変わった自分を

変わる前の自分に変えてしまっただけ

元に戻さないで

人はいつも変わっているのだから

立ち止まっている気にならないで

本当は動いているのだから

感覚の小枝を空中に目一杯伸ばして

動きを感じ取って

あなたは動いているはずだから

+++++



月齢 0・1

真昼の青い空に浮かぶ黒い月

誰も気にしないのにそこにちゃんと存在している

存在しているのに

まるで私のよう

私はここにいるのに

誰もが私を見つめているのに気が付かない

そんなのはいやだ

誰か気が付いてよ

私がかここにいることを

+++++



## 時間行進

ゆるゆると続く道

目の前には古ぼけた時計

ボーン ボーン

どこかが壊れてどこかが震える音

朽ち落ちた針が手招きをしている

おいでおいでこっちにおいで

僕は素直に前に進む

ボーン ボーン

時計はいつの間にか前のほうに移動している

足があるわけでもないのに

音もなく動く

ボーン ボーン

時計がまた僕を呼んでいる

僕を何処に誘うのだろう

僕は何処に行けばいいのだろう

ボーン ボーン

時計と二人

いつまでも続く行進

何処までも続く行進

ボーン ボーン

僕のあとには心の欠片が散らばっている  
何かをなくして僕は進む  
それが未来への道だとしても

## メリーゴーランド

真夜中の遊園地に  
一際眩しくライティングされるメリーゴーランド  
白い木馬やカボチャの馬車  
上に下に飛び跳ねて  
世界の中心で回っている  
心踊るメロディーに乗せて  
妖精の鱗粉が七色の風を作っている  
誰も乗っていないメリーゴーランド  
いつまでもいつまでも回り続ける  
夜空に散らばる星屑が朝の足音に怯えても  
誰かを待っているメリーゴーランド  
哀しい心に押し潰された君  
希望を失った迷い子  
泣き叫ぶ声が涙の泉に消える  
ここに来ればみんな笑顔になる  
回れまわれメリーゴーランド  
いつまでもいつまでも

## 恋をしてみませんか

別にあの夕日のように

燃え上がるような

赤い恋でなくてもいいです

海の底に広がる

深いブルーの恋でもいいです

見渡す限りの

黄色いひまわり畑の中でゴッホの絵のような恋でもいいです

初めて植えた

朝顔の種から生えてきた緑色の双葉のような恋でもいいです

恋をしてみませんか

形骸なんか関係ない

その心に恋してみませんか

私は君に恋をしそうです

夕焼け空を見つめている君の瞳に

私は恋をしてみます

幸せに

なれるでしょうか？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

## 月下美人

平凡な時間ばかり通り過ぎていた私

初めて私の時計のビツクベルがなったときに

あなたが目の前に立っていた

灰色の空から鉛の雨が降り続く毎日が

いやでたまらなかつた梅雨のある日

学校の帰りにふと立ち寄った本屋の隅のほうに

背中を丸めて濡れ鼠のように参考書を探していたあなた

まだ降り続く雨の中に二人して相合傘で

家路に向かうとき空から降る雨粒が

まるでカラフルなキャンディーに思えてきた

夏祭りへ一緒にいく約束をした私は

浴衣を選びながら鏡に向かって祈った

「一夜限りでもいいからどうぞあの月下美人のように輝いて咲くことが出来ますように」

あなたと二人で歩く神社の空には真ん丸い月が輝いていた

## 道

歩けども歩けども果てしない道

アスファルトで舗装されていない荒れ果てた道

街灯もなく夜の闇に飲み込まれている道

いつも誰かが後ろからついてくる感覚のある道

いつまでこの道を歩いてゆけばいいのだろう

どこまで続いているのだろう

僕は疲れきった足を擦りながら歩き続ける

道って何だろう

歩かないといけないのかな

ここにうずくまっついてはいけないのかな

月明かりに照らされた道は何もいわない

僕はまだ歩き続けている

この世界の果てまで

咲き誇る花、舞い飛ぶ蝶、そして私

今年も花を植えましょう

お庭いっぱいに花を植えましょう

遠い遠いあの空の果てからも見えるように

たくさんの花を植えましょう

色とりどりの花を植えましょう

たとえ闇夜が訪れようともそこが見えるように

色とりどりの花を植えましょう

あなたは遠くの世界に旅立ってしまった

あなたは漆黒の闇夜に消えてしまった

あなたは私の前からいなくなってしまった

そして私は魂の抜け殻になった

けれどもあなたの魂は美しい蝶になって

私の元に戻ってきてくれる

だから私は花を植えます

色とりどりの花を植えます

お庭いっぱいに花を植えます

今年もあなたの魂が私の元に舞い戻ってこれるように

今年も花を植えました



## 祈り

神様、僕はなんてひ弱で儂い存在だったのでしょいか

普通の世界がとても高く手の届かない存在だった

何とかがんばってその頂に登ろうともしました

だけど僕にはその道のりは果てしなく遠く

未だにこの奈落のそこにうずくまり

ただ、声にならない泣き声ととめどもなく溢れくる涙の泉に溺れて  
しまっています

僕は人間になることはできないのでしょうか

神様、出来るなら僕をその身元に呼び戻すのならばお願いします

僕を再びこの世界に送り出すことがあるのならば

生きる恐怖のないか弱い生き物にしてください

誰もその死を知ることがないような小さな生き物に

そして、いつしかあなたの存在までもがこの意識から消えてなくな  
るように

僕は今という時間の狭間に迷い込んだ蟲です

神様、僕の声が届いていますか

僕はここにいます

## 告白

その何気ない一言が口からこぼれずにいる

感じたままの本当の心の言葉なのに

なぜか君の目の前に来るとのどの奥に押し戻してしまう

言葉にすればどんなに君のことを思っているのか伝えられるのに

僕の口はそれを拒絶してしまう

もっと僕がおしゃべり上手だったらこんなに苦しまなかっただろうか

逆に僕が口下手だったらこんな苦しみなんか考えもしなかっただろうか

紙に書いて送ればそれですむのか

そんなこと考えなくてもわかっていることなのに

君を好きだといつづこの気持ちは口から発する言葉でしか伝わらない

明日は勇気を振り絞って伝えよう

「君が好きです」

## 色のない写真

いつも夢はモノクローム

懐かしいあの人の顔も

住み慣れたあの街角も

いつも色のない世界

だけど子供のころに大好きだったマフラーの赤い色は思い出せる

夢の世界はいつも色がないけど

思い出の世界には色鮮やかなシーンが湧き出てくる

このごろ夢を見ない

いつも色のない世界に浸り

いつの間にか思い出の世界も色あせていつてしまつ気がする

十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十

十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十

十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十

あの雲のよつに

この体が小さな水の粒になったとしたら

あの青い空高く舞い上がることが出来るのに

透明な水の小さな塊もたくさん集まれば白い雲と変わる

勝手気ままに風任せ

ふわふわとたなびき

いつも形が変わる雲

どんなに形が変わっても雲はいつもふわりふわり

あんなふうに生きて生きたいな

あんなふうに軽くふわりふわり

心も軽くふわりふわり

いつも燦燦とお日様を浴びて

+++++



## 苦しみの彼方にあるものは

人はなぜ苦しむのだろう

子供から大人へと羽化するときの苦しみ

何処か体の具合が悪くなつたわけでもないのに

心が痛む気がする

苦しみは必要なのかしら

人は言葉を作り出してから

飛躍的な発達を遂げてきた

その代償が苦しみ

現実と空想のギャップを

苦しみという形で知らせてくる

あなたが今苦しいのは現実から目をそらしているということ

心がその警鐘を鳴らしている

だから目をそらさないで

現実を変えることなどできないのだから

そんな空想の世界に生きたいのなら

永久の世界に旅立つほうが幸せなのかもしれない

引止めはしない

それが他人に迷惑をかけないひとつの方法なのだから

だけどちよつとだけ立ち止まって

苦しみの彼方にあるものを考えてみて

それが生きてきた理由なのだから

## 君に贈る花の種

旅立っていく君に朝顔の種を送ろう

夏の強い日差しを浴びて大空に両手を広げるように

その双葉を伸ばし

人生という避けて通れない試練の垣根にも

たくさんの蔓でその体を結わいつけて

朝の清清しいひと時に愛らしい花を咲かせる

そんな朝顔の種を君に送ろう

いつかその種は幾千万もの種を生み

君の周りにはたくさんの朝顔が咲くだろう

朝顔に囲まれた君に幸せが微笑みかけますように

+++++

## 雷鳴の鼓動

外は黒雲に覆われて

今しがたから激しい雨が降り続けている

あなたと出会ったあの日もこんな雨の降る日でした

傘を忘れた私がお店の軒先で雨宿りをしていると

「どうぞ」といって自分の傘を差し出したあなた

あなたはそのまま濡れるのをいとわなないで

雨のカーテンの向こうに消えて行った

同じ会社の顔見知りだったけれど

言葉をかけられたのはあれがはじめて

私はあなたが差し出した傘を差して家路に着きました

遠くで雷鳴の響きわたり、私は少し肩をすばめたけれど

心臓の鼓動がそれと同じくらい響き渡るのに気が付いた

いまもまた雷鳴が響いています

もうすぐ帰ってくるあなたを待つ私の鼓動も

雷鳴のよつに今も体中に響き渡っています

気晴らしに歌でも歌いませんか？

こんな気分の優れない日には気晴らしに歌を歌いましょう

子供のころに学校で習った歌でもいい

青春時代に夢中になった歌手の歌でもいい

今流行のグループソングでもいい

元気が出るまで歌いましょう

歌詞なんて覚えていなくても

音痴だと悩んでいる人も

そんなことは気にしないで

ハミングしてもいいから歌いましょう

体いっぱいのリズムを取って

昨日の悩みなんて吹き飛ばして

明日の不安なんかかき消して

今は一生懸命に歌を歌いましょう

自然と一体化して

心臓の鼓動がラップを刻んで

体をすり抜ける風がハーブの調べをかなで

私の居場所はコンサートホール

ほら、気持ちが開放していくでしょう

新しい一日は始まるから

だから気晴らしに歌ってごらん

## 君に会いたい

いつも言葉だけの君

落ち込んでいるときも

泣いているときも

笑っているときも

怒っているときも

君は言葉のパズルを組み立てていたね

完成しないパズルに君は苛立ち

言葉を失うこともあるけれど

いつも君は言葉の向こう側にいた

君に会いたい

君の姿を空想の世界で奏でているのはもう飽きた

君の暖かさを思って飲むコーヒーはもう冷めてしまった

君の声に踊る小鳥たちももう眠りの世界についてしまった

君はどこにいるの

この空の下はどこかに君はいる

この風の行き着く先に君はいる

この雨の流れ行く先に君は確かにいるはずだ

だから僕は君のいる場所へ歩いていこう

君に会いに行くために僕は生きていこう

いつか会える君のために

道端で摘んだ花を手にとって

君に会いに行く

君に会いたいから…

## 夢の行き着く場所

いつも夢を見ている

夢を見ない人生って味気ないでしょ

憧れのブランドの服に身を包み

大好きなスイーツをおなかいっぱい食べて

素敵な男性と手をつないで夜のディズニースーシーを歩くの

いっぱいいっぱい夢を見たい

いつかは叶うはずでしょ

けどね

夢って夜しか見れないの

眠りについたベットの上

叶いそうになると目が覚める

儂い夢の行き着く場所はたぶん

あなたと一緒に眠りの世界に誘う

夜の向こう側なのかもしれない



## 窓辺に咲く花

窓辺に置かれたガラスの花瓶

今も君の残したバラが咲いています

殺風景なこの部屋に明るさを灯そうと

君が買ってきてくれた赤いバラ

当の昔に花瓶の水は枯れ果てて

バラは乾いて茶色くなっています

だけど花の赤はいまだに誇らしげに輝いています

今も君の事を思い出すとこのバラを眺めます

バラの花よりも美しかった君の姿を

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

## 一人ぼっちの帰り道

空が赤く燃えるころ

摘み取ったお花と一緒に帰りましょう

お空に鴉がカーカーカー

いっぱい遊んだからお腹が減ったよ

今日の夕御飯は何だろう

ハンバーグだったらうれしいな

だあーれもない帰り道

一人でてくてく帰ります

今日も一人で遊んだの

だあーれも遊んでくれないから

だけど森の動物たちがいつも私を見つめてくれる

だからちっとも寂しくないよ

もうじきお家が見えてくる

明日も天気だったらいいな

+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+  
+

## 子供のころ見た夢

子供のころに見た夢はもうほとんど食べつくしてしまった

おなかいっぱいハンバーグを食べる

好きなおもちゃを買う

ジュースはいつもオレンジジュース

あんな夢もこんな夢も

大人になった今はたやすくできるものばかり

だけど、ひとつだけかなわなかった夢もある

それはかわいいお嫁さんになること

こればかりは相手がいないとかなわないから

そろそろ、三十路に近づく私の最後の子供のときの夢

白馬に乗った王子様が現れて私をかわいいお嫁さんにしてくれます  
ように

春はまだ遠く

いつまで冬が続くのかしら

このまま、ずっと…

いやよそんなの

早く来てほしいの

体に纏った分厚いコートを取り去って

春になればきっと私も生まれ変わるはず

もっと綺麗になってやる

もっと可愛くなってやる

そして、とびっきりの男を捕まえに行くのよ

だから早く春が来てほしい

+++++

+++++

+++++



## 心に咲く赤い花

日差しは春なのに風は真冬のよう

体は温かいのに心は氷のように冷えている

あの人という瞬間も

なぜか私の心は氷のまま

楽しくて笑顔のはずの私なのに

なぜか青い空の向こうを見つめてしまう

心が一人ぼっちでいる

誰も私の心に触れることができない

みんな自分の心が私の心みたいに凍りつくことを恐れて

いつの間にか心は枯れ果てて

砂漠を転がる枯れ草のようになってしまった

もう涙さえ心に染み込まなくなった

それでもいつかは赤い花を咲かせたい

## 戻り雪

やっとたどり着いた春の日差しの下

憧れだった彼と腕を組んで木漏れ日の中を歩いていく

凍えた私の心を溶かしてくれた彼の腕は温かくて

このまま、夏に変わるものと思っていた

だけど、雪はまた降り出した

ほんの些細なことで喧嘩した

暖かかった日差しは真冬の吹雪に変わってしまった

また、凍える日々が続くと思った

次の日曜日

彼は一輪のバラの花を携えて私のところに来た

また春が戻ってきた

あの雪は戻り雪

これからの二人の間には降るかもしれない戻り雪

この次は私もがんばらなくっちゃ

わがままばかり言わないようにした

## 愛する理由

今日も彼からの連絡がなかった  
もう何日、こんな状態が続いているのだろう  
約束はすぐに忘れるし  
いつも私は置いてきぼり  
会いたいのに出会うことも出来ずに  
いつも泣いている私  
そんなオトコなんて早く見切りをつけて  
新しい明日を探そう  
そんなこと分かっている  
分かっている  
だけど… だけど私は彼が好き  
なぜだか理由は分からないけど  
だめな彼なのに  
それでも… 好きなの  
理由なんてない… わからない  
好きになるのに理由なんて…  
理由なんて必要じゃない  
理由の必要な愛なんてあるわけないんだから  
… あるわけない… はず

## プロポーズ

手を振るとあなたはそこにいて

私に笑顔でこたえてくれる

つまずくとすぐに私を助けてくれる

涙がこぼれるとティッシュを渡してくれる

いつの間にか神様みたいに私のことなんでも分かっってしまうのね

そんなあなたに甘えてばかりですいません

だけど、私はあなたなしでは生きていけなくなってしまうました

だから…

結婚して

＋＋＋＋＋  
＋＋＋＋＋  
＋＋＋＋＋

## 鏡の向う側の自分

どうしよう…好きになっちゃったかもしれない  
だけど…彼は親友の彼氏

今日始めて彼を私に自慢げに紹介した彼女

とっても綺麗になっていた

それよりも私は彼のかっこよさに惹かれていた  
だって、背も高くて話も面白い

彼女との会話も息が合っていたわ

そんな彼に私は一目ぼれ

ああ、どうしよう

やっぱり親友の彼氏に手を出すのはまずいわね

だけどこの胸の鼓動は抑えきれない

何とかしたい…何とかなるのかしら

突然、思い立ったようにコンパクトを開いて化粧を直す私

鏡の中の私が冷ややかな目をして問いかけてくる

「あんたはいつもそう。他人の幸せが自分のものと勘違いする癖は  
早く治しなさい」

そうなんだ

前にもこんなことがあったけど

結局、すぐに熱が冷めちゃって

いつも勝手に傷付く

早く目を覚ましなさい

本当の恋を早く見つけなさい

鏡の中の私がそう言っている

## 灼熱の恋

妄想でもいい

幻想でもいい

空想でもいい

私は燃えるような恋がしたいだけ

たとえこの身が灰になろうとも

たとえピエロと笑われても

たとえそれが現実でなくても

私は燃えるような恋がしたいだけ

+++++

## 深呼吸

大きく息を吸い込む

まだ冷たい空気が肺の中に満ちてくる

体の中に何かが入ってくる

世界の一部かしら

息を吐くと私の体に巣食う悪魔の欠片が少し出てくる気がする

生まれてから死ぬまで意識に関係なく行われる行為

それは生きているバロメーターのようなもの

あなたは今生きていますか

私は今生きています

++++  
++++  
++++

## 思い出の場所

土曜日の午後、七年ぶりに懐かしの教室に入った

すでに終業式も過ぎ、校庭に部活動をする生徒がいるだけだった

私の使っていた机はあのときの場所にはなかった

左隅に小さく落書きした机

何処にいつてしまったのか

探したくてもこれだけ同じ形の机があるとちょっと無理かしら

窓辺に差し込む日差しは今もあの日と同じだった

卒業式の後みんなで騒いだあの日

先生はどうしているのかしら

後で職員室にも顔を出そう

学生の時には行きたくなかったあの職員室

来月からは私の職場になる

## 春の嵐

乾ききつた冬の空に暗く立ち込める雲  
頬を切り裂くような冷たい風は横殴りの雨粒へと変わる  
草木は枯れた枝を必死に引きとめじつと我慢している  
僕は降りしきる雨の中立ちすくみ  
体を震わせるばかり  
自分は何をしようとしているのだろう  
どうしたら良いのだろう  
冬の冷たい雨は容赦なく僕の体温を奪っていく  
草木はなぜあんなにじつと我慢できるのだろう  
そんなことを考えていると  
心の奥底に仄かに光る蠟燭の火に気が付いた  
そうか、そうなんだ  
みんな春が来ることを知っているんだ  
あの蠟燭の火は春の暖かさの記憶  
この雨がやめば春が来る  
この僕にも必ず春が来るんだ  
だから右足を一步前に出そう  
春の訪れを迎えに行くために

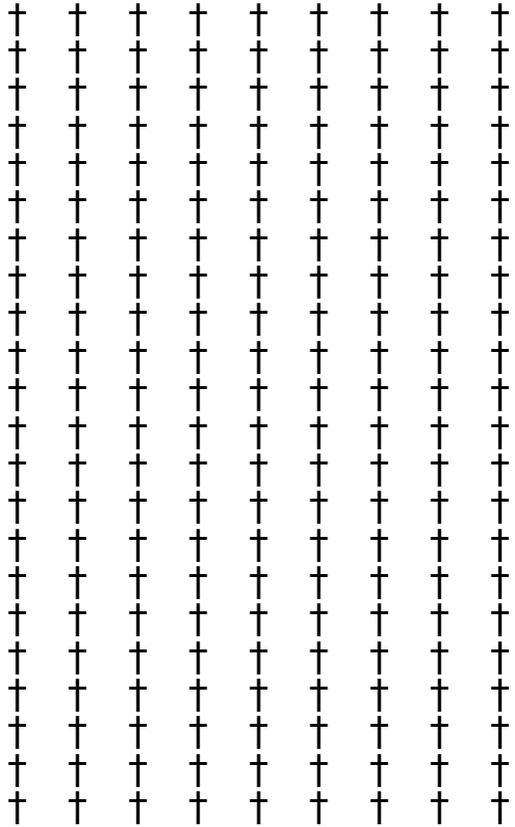
野良猫

とりあえず食べ

人間に媚を売ってもいいから

食べ

そして生き延びる







## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0579q/>

---

言霊詩篇 白書

2011年1月12日01時09分発行